



Title	天保山は如何にして出來たか（要旨）
Author(s)	江崎, 政忠
Citation	懐徳. 1932, 10, p. 45-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

天保山は如何にして出來たか（要旨）

江　崎　政　忠　述

天保山はどうして出來たかと一口に申上げると、原因が直接と、遠因と言はうか、さういふものとに分けて見ることが出来ます。

御承知の通り、淀川の川尻は非常に土砂が堆積をする處であります。だから大阪の方へ船がよくはいつて来るやうにするには、どうしても安治川の泥を浚はなくちゃなりません。これは徳川時代から出來たことではありません。日本開闢以來——神武天皇この方、明治大帝が東京においてになるまでの間の帝都といふものは、皆淀川の流域にあるのです。そんならば、大和にあつた都は大和川の流域ぢやないか、今大和川は堺の方に流れて居るぢやないかとおつしやいませうけれども、これは元祿年間につけ替へたもので、それまでは天満の只今の寝屋川の所へ落ちてゐたのです。それですから神武天皇以來列朝の帝都は、淀川の流域にあつたと申すのです。

そこで列朝の帝都のある處がどこでも一番早くから開け、人口も一番餘計あつたのであります。それですから開けて來るごと、一番に家を造らなければならん、又色々の器具や器物を造り、或は少から

ざる薪炭等に多量の木材を使はなければなりません。夫れ故列朝の帝都のあつた處が、一番に立木のあつた山地が荒れて來るのです。飛鳥朝から奈良朝にかけて、一番文化の開けて居つた所の歸化民族の居住して居つた處は、大和の飛鳥であつた。それでの邊の山が一番ひどく荒れて、土砂を大和川に流出したのです。殊に飛島朝から奈良朝にかけて益々大建築が興り人口も殖えて來て、木津川（昔の泉川）並に宇治川流域に迄用材を頻りに伐り込んで參りました。夫れに都が京都に移されてからも、大建築が火災等の爲めに屢々建替へられ、淀川流域の奥から木材を長い間伐り出しました。夫れで水源の山々が皆荒れて降雨の度に非常に澤山の土砂が淀川に流れて來てたのです。左様いふことは、昔の歌を讀んで見てもよく分るのです。其歌に詠みこまれた難波の蘆といふものは、土砂が段々流れ来て來て、川口が埋もれて淺くなつて其處へ生じるのです。而して之れが爲めに川筋が常に變更致します。それで川筋即ち船の通り路を濬標で示したのです。つまり淀川に始終土砂を流して來るから、船の通る處が始終變る。それで濬標を立てゝ通り路を示すのです。濬標と難波の蘆の歌は、國歌大辭典の世をすごしてよなごを見ても何百首あるか知れません。百人首の中には難波の蘆を詠んだ歌が三つもあります。さう難波江の芦の荷り
わねの一夜ゆへ身なり
難波湯短かき芦の
の世をすごしてよ
わびぬれば今はた
おなじ難波なるみ
わたらべき

因であります。

一體天保山といふものはどうして出來たかといふと、安治川口を埋めた泥を浚つた土を積んで出來

たのであります。それが今申上げる近因であります。天保山の出来たのが天保二年ですが、その天保二年に天保山の出来た大阪の方の理由を詳しく書いたものは、浪華叢書の第六巻に出て居ります。どういふわけで俄かに安治川を浚ふやうになつて、天保山を築いたかといふと、これには非常に面白い歴史があるのであります。

琵琶湖治水沿革誌といふものを調べて見ますと、随分色々な沿革がありますが、琵琶湖は御承知の通り、今でこそ京都の方へも疏水が出来て落ちて居りますけれども、あの出来る前までは、瀬田川に落ちるより外に水のはける路はございません。然るに其瀬田川に浅い處があるために、それを浚はんといふと、江州の方は水が湛へて仕方がない。それで昔は瀬田川を浚へるといふことが、始終起つた問題であります。あの水を減らすといふことが、江州では唯一の問題になつて居つたのです。所が瀬田川の、只今で申せば南郷の洗堰の所ですが、あそこが非常に淺瀬になつて居り所々に島が出来て居る。あそこは黒瀬とも又供御の瀬ともいふやうに、色々名前がありますが、それが琵琶湖の水の流れを邪魔するのです。それですからどうしても浚ひたい。

供御の瀬といふ名はどうして出来たかといふと、昔あそこは淺くなつて居りまして、天子様の召上る氷魚を取つて天朝に出して供御に致したので、それで供御の瀬といつたのであります。

所がこの淺瀬は歴史上から言つて非常に面白い淺瀬であります。それは徳川幕府三百年の秘密であ

つたのです。否頼朝が鎌倉に幕府を開いて以來の大事な所です。要するに關東の方から京都を攻めて来る時の戰さですが、その時京都を守るには、北の方は龍華、瀬田、供御の瀬、宇治、それから牧島、一口(芋洗)、山崎、これだけを守らなければなりません。その中で一番大事な處は供御の瀬です。其處は淺瀬で徒渉が出來るのです。そこで徳川幕府三百年の間、その淺瀬を大事にして秘密に保存して置いたのです。徳川幕府ではこの秘密の淺瀬を保つために、親藩の本多家を膳所に置いて、淺瀬を保護させたのです。それでもまだ安心が出來ないので、井伊家を彦根に置いて監督せしめたのです。京都所司代も其代が代ると一度は其淺瀬を検分を行かなければならなかつたのです。淺瀬を検分するといふと工合が悪いから、漁をするといつて檢分に行つたものです。その淺瀬の所へ南郷の洗堰を拵へる時に掘つたら、小さな棒杭が一萬本も打つてあつたと云ふことです。それ程保護して居つたのです。さういふことは江州の人は知りませんから、夫れ故江州の人は昔から此の供御の瀬の淺瀬を掘つて貰ひたいといふのです。一體此の淺瀬は如何して出來たかと云ふに、此の所に落ち込む田の上川の上流からは・昔から木を盛んに伐つて出したために、山が荒れて土砂を流して來て、彼處を埋めて居るのです。萬葉集に藤原の都の役民歌といふのがあります。これは藤原の都を拵へるために、田の上川から木を盛んに伐つて出した。この歌の本當の意味は、山林家でなければ眞の解釋が出來ないと思ひます。田の上川で大きな木を伐つて宇治川を流し淀へ持つて來て、泉川へ持越し、今の木津で陸に揚げて、而し

て藤原の宮へ持つて行つたのです。其急流の淀川から泉川へ長大の木材を持ち越すことは、命がけの難事業であるが、我忠勇の國民は天子様のためには自分の身も家も忘れて、一生懸命に働いて居る處の有様を歌ふた歌なんです。持統天皇の此の藤原宮の御造營、文武天皇の時の奈良の都の建設、聖武天皇の大佛建立の時の用材は、皆田の上川の上流は勿論、江州の山々の木を盛んに伐つたのです。そのために江州の山々は非常に荒れたのです。之れと同時に泉川即ち木津川流域の山々の木も伐採せられて、此の川よりも土砂を流出したることは勿論です。夫れ故織者は昔から川を浚ふことも去ることながら、其水源の山々に木を植ゑなければならんと主張して居りました。現に河村瑞軒なども左様言つて居りました。

そこで瀬田川の淺瀬は前にも述べし様に關東から京都を攻めるのに極めて大事の所である。併し夫れは絶対に秘密にせらるによりて江州の人は左様なることを知る由もないから、頻りに其淺瀬を浚つて貰ひたいと言つて居るのです。徳川氏が天下を取つてから、一度河村瑞軒に浚はしたけれども、それは上面だけをやられたのです。その淺瀬のために米は何十萬石といふものがこれなくなつて居るのです。一度大雨が降ると相當廣い水田が水につかつてしまふのです。而して琵琶湖の水のはけ口は此の瀬田川だけですから、一旦水がたまると容易に引かないで、沿岸二百何十ヶ村が長く水につかてしまふのです。明治二十九年の水害なども大へんなものです。それで瀬田川の淺瀬たる供御の瀬

を早く切開かなければならんといふのが、江州の人の一般の希望であつたのです。併し幕府の方では、よし此の淺瀬をさらつてもほんの形式ばかりで、本當にやつてくれないのです。

そこで天保から遡つて凡そ五十年間位は、毎年々々幕府に願ひ出たのです。初めは幕府の費用で彼處を凌つて貰ひたいと願つたけれども、幕府ぢやどうしても承知しない。そこで沿岸の村民が私共が其入費の御手傳ひしますからと言つても、幕府ぢや承知しない。それぢや一切を私共の自力でやらから許してくれと運動したのですが、それでも幕府は許さない。けれども毎年々々運動をやるものですから、幕府も仕方がないから、奉行を派して検査せしめた。而して複命の後には其役をやめてしまふのです。而して此の如きことを何回となく、くり返へしたのです。之れは皆幕府の政略で、見分役人が交迭して解らぬから再調をさせる、新に見分の役人を派して調べると云ふて、其間をごまかしたのであります。

一體琵琶湖の周圍は五つの領分に分れており其村數は二百餘もありまして、而して其各村の間に利害が一致しないのです。其連年の請願も一致の行動を執ることは出来ませんかつた。併し高島郡の或庄屋の如きは代々非常な熱心で、極力運動をして、遂に文政年間には、時の執政者たる白川樂翁公に、駕訴までして居ります。一體駕訴は徳川幕府の禁ずる處で、犯すものは打首になつたのですが、流石は樂翁公です。其庄屋を刑せずには申立てを聞いて、其庄屋を村に歸へましたのです。而して此の

瀬田川の下流、淀川沿岸は數多の領分に分れて居りました。そこで江州の方では其淀川沿岸に領地をもつて居る領主に、皆夫々交渉をし、數年かゝつて皆承諾を得たのです。此の如き種々の運動が約五十年續いたのです。仕舞には幕府も其煩に堪へず困つてしまつて、天保頃になるといふと、幕府の勢力も稍衰へて來たのです。さうしてあんまり騒ぎがいらないために、たうとう根負けをしたのです。下流淀川沿岸の領主が異存がないといふならば、浚ふことはよろしい、併しそれもなるべく淺くやつて、深くやらないやうにと言つて許したのです。さうして幕府は大阪の三郷（東組、南組、天満組）に對して、江州でやかましく言つて困るから、瀬田川の供御の瀬をざつと上面だけ浚ふが、お前達の方は異存はあるまいと下問したのです。其當時幕府の考では、ほんの上面だけを浚ふので、それがために水がさう澤山ふにて來ることはないから、大阪三郷に於ても異存はなからうと信じ、唯念の爲めに下問したのです。然る所、東と南の兩組では、幕府であゝおつしやるから、承知しやうぢやないかと言つたが、天満組の者は承知しない。夫れは元大阪に來た船が、此頃では多く瀬邊に泊つてしまつてこつちへは入つて來ない。夫れは安治川口が段々土砂で埋まれて淺くなつたからである。然るに江州で瀬田川をさらつて餘計に土砂を流されば、川口が益塞つて、愈々船の出入が困難になつて、大阪は段々さびれてくるから、之れは御許しにならぬ様に願ひたいとの議論でした。其議論は至極尤もなるによりて東組も南組も之れに賛成してしまつたのです。そこで幕府ちやはたと弱つてしまつた。とい

ふのは江州には既に浚渫を許して居り、今大阪が反対すればとて之れを取消すことは出来ませんからです。幕府はそこで窮したる結果、安治川口を浚つてやつたら異存はあるまいと、又大阪に下問をしました。大阪では夫れなれば結構ですと承諾しました。所が之を浚ふには莫大の入費がいるのです。然るに此頃は幕府は家齋將軍のおごりを極めた以來、財政は益々窮屈にして、左様云ふ工事に要する金を支出することは仲々に困難ですから、幕府一流の政策を用ひたのです。淀川の川口を浚ふ以上、其分流の落ち口たる正蓮寺川、神崎川、中津川等の枝川も浚はなければならん、それには仲々の大工事で頗る六ヶ敷仕事であるから、お前達大阪市民の内によき工夫の考へがあるなら申出よ、つまりこの川筋を浚ふにはどうしたらよいかといふ下問を發したのです。

その揚句がどうしたかといふと、幕府の方ではなか／＼づるいことをやつて居ります。砂の欲しい者には砂をやる、土地を埋立てるとか、道普請をするとか、砂の入用の者には砂をやると言つて居ります。又而して決してお前達の方に寄附金をせよといふやうなことは言はない、言はないけれども、これだけ廣い處を思ふ存分に浚ふておくことは、お前達子々孫々まで大阪のためにもなるぢやないか、幕府の考へでは、經費の都合もあるから、安治川を一通り浚ふだけだが、大阪の將來のことと思へば、今一所に一思ひに廣く又深く充分に渫へておく方が得策と思ふ、幕府でも出来る丈けさうしてやり度いが、何分經費に限りがあるから、左様充分のことは出來ぬから、御前方が子孫の爲め、又大阪の繁

祭を祈るなれば、此の際に思ひ切つて金を幕府へ出して一所に仕事をして貰ふてはどうかと言つて、裏面から非常に巧妙なる手段を用ひて寄附金募集をやつたので、それが當つて大阪の富豪は皆金を出したのです。鴻池さん、加島屋さんから千三百両づゝ、三井さんからも七百両から出して居ります。それから又町内にも割付けて募集し、結局二萬何千両になつてゐます。今金にしたら非常に大きなものです。その外に砂を捨てることに就ては、お手傳ひを希望の者があるなら、許してやらうといふのでした。それが大へんなことになつて、實に盛んなものになつてしまつた。まるで大阪中お祭が一所に來たやうな騒ぎになつたのです。今日はどの町が出る、明日はどの町が出るといふことが順番になつた。揃ひの衣、揃ひの法被に揃ひの手拭に、足固めといつて屋台まで持ち出し、又色々なものを持へて飾り立てゝ行つたのですが、それに事故あつて出られない者は相當の入費を出さすとかして、盛んに飲み食ひをして踊つたりはねたり非常な騒ぎを致したのです。しまひには役者を連れて出る、役者を連れて來ると云ふ有様で、又それを見に行く人が出るといふことになつてしまつた。極端なものになると、四斗樽に幾分砂を盛り、それで一樽を八人で荷ふと云ふ有様でした。それで幕府では、役者藝者なんかを連れて行つて御祭さわぎをしては相ならんと屢々布令を出して居りますが、これは眞に形式的で少しも改まつたことはないのです。此んなお祭りのわざをして出來たのが天保山であります。

天保山が出来たといふので、天保山百景だとかいつて、色々な木を植付けたり設備をしたりして、天保山が其當時の大阪の遊園地になつたのです。大阪の者は其當時他に餘り遊び場所がないので、頻りに皆其處へ遊びに行つたのです。兎に角非常に珍しいものであるから、仲々一時は繁昌を極めたものです。

幕府におだてられて、さんぐ～お祭り騒ぎをやつたから、其あとでは實際大阪の者は非常な迷惑をしたのです。安治川を浚つて天保山を造るにかけた金よりも、お祭り騒ぎに使用した金の方が非常に多くかゝつたのです。

尙ほ前に少し申落しましたが、幕府が江州の瀬田川を浚ふことをいやがつたのは、供御の瀬の渡涉點保護ばかりでなくして、外にも理由があつたのです。即ち琵琶湖の水が減じて干渴が出来ると、京都押への大事の城の彦根や、膳所の城の要害が損せらるゝから、夫れも琵琶湖の水をあまり落すことを好まなかつたのです。

天保山は後にどうなつたかといふと、安政、嘉永の頃には、其遊山場が砲臺を築かれ外艦の入港を防がんとせられました。その砲臺はつい先頃まで其形が残つてあつたのです。さうして最近には御承知の如く、一部は商船會社の船の發着所となり、其大部分は陸軍糧秣所となりて、其一部分に小阜を残して史蹟として保存して居ります。

終りに臨みて天保山に對する明治大帝に關する一小話を御話申上げて、此の講演を終らうと思ひます。明治大帝の御事蹟編纂局副總裁の藤波言忠子爵の御直話に、明治二年に明治天皇が御年十八にて江戸へ行幸になりました。その時藤波子爵は十九でお伴をされたのです。然るに子爵は生れ落ちてから其年迄京都で暮されて他處へ行かれたことがない。それが供奉をして初めて江州を通行されて琵琶湖を見られて、こんな大きな所が世の中にあるかと非常に驚かれたのでした。さうして江戸へ行かれて、或る日陛下の御前に出られた時に、子爵は陛下に奏上せらるゝには、さてこの度お伴して江戸に参りまする途中、江州で琵琶湖を見まして、あんな廣い所が世の中にあるかと思つて非常にびっくりしましたと申上げらるゝと、陛下には、さうか、わしも去年天保山へ行つて始めて海を見て、其廣いのに驚いた、とおつしやつたさうです。御上にても京都の御所より外に御承知なかつた故、之れは誠に御尤の次第であります。明治二年に大帝は此の天保山に行幸ましまして、始めて觀艦式を行はせられたのです。

又信州や甲州邊の山國の人々が、山より大なるものを見たことなき故、始めて海を見ると皆其廣大なるのに驚くのです。私なども十歳の時に信州より東京に出で、始めて海を見て頗る驚いた一人であります。